

弥勒から「ミロク」
——韓国仏教民俗史の一側面——

八田 悠吏那（金 泰順）

1) 研究の意義

仏教は韓国文化に多くの影響を及ぼした。それは韓国に散在している優れた仏教建築物や仏像からもその証明ができる。すべての宗教がそうであるように宗教が伝来した時は宗教とともに宗教文化が伝来される。その宗教文化はその土地の在来文化と接触をすることとなる。いわゆる文化人類学が主張する文化接変現状である。文化接変現状には多くの変数が発生するのが一般的な現象である。その変数をどこからどのように見るかによって仏教民俗学の見方観点が変わるのであろう。

韓国の場合、長い歴史の上に仏教文化が韓国民俗の深層部まで深く入ったことは事実である。民俗の信仰行為は仏教儀礼の形態に大きい変化を生じさせて、今日の韓国の仏教民俗になったのである。

この問題について筆者は仏教の影響を受けている民俗物を選定して仏教と民俗の相関関係を調べる事とした

研究方法として民俗学立場から韓国の仏教民俗について考察する。「モノから見る」という立場をとる。まず、仏教的な要素を内包している伝統物を調査探索、その伝統物を中心とした儀礼に参加し、仏教と民俗の接触面の相関関係を分析、考察を通して現在の視点から過去を読み取る立場をとり、未来の民俗学の行方を模索する作業をすることにした

「モノ」として選んだのが「ミロク」である。仏教の弥勒から現在の民俗伝統物「ミロク」になる境界線の民俗を歴史的な視点から探り、現在に行われる儀礼との関連性、また現視点の仏教民俗が未来に変わる変数についても考えて見ることにした。

2) 研究の成果

①「ミロク」は仏教から借用した民俗物

弥勒が「ミロク」になったことについては、韓国の仏教民俗の内容ともいえる。一言でいうと「ミロク」は形式と内容の一部を仏教から借用した民俗物である。さらに、「ミロク」の形態は固定されず、何回かの変遷を繰り返した。これは民俗が時代によって変遷を繰り返すからである。それは長い歴史の中で徐々に起こった変化である。三国時代から朝鮮時代までの庶民の苦難の歴史の中でじわじわと起こったのである。

仏教が入った三国時代には貴族中心の仏教であった。当時の弥勒信仰は貴族中心の弥勒上生信仰と庶民中心の弥勒下生信仰とに分けられる。弥勒上生信仰の弥勒像は半跏趺坐で

座り何かを考えている形の半跏思惟像である。このときの弥勒はまだ仏になる前の段階であり、弥勒菩薩という。したがって半跏思惟像は弥勒菩薩半跏思惟像という。しかし、弥勒下生信仰になると弥勒像は立象になる。なぜならば弥勒がこの世を救うため来る途中であるからである。

②「ミロク」信仰はメシア信仰

「ミロク」信仰は弥勒下生信仰に基づくメシア信仰である。このようなメシアニズムが韓国で盛んになったのはいくつかの理由がある。その一つが絶えまない戦争と苦しい生活に苦しむ民衆がメシアを待望したからである。さらに弥勒の出現を予言する鄭鑑録は民衆のメシアニズムに火をつけたのである。

③「ミロク」の習合過程

「ミロク」は民間の信仰物になってから類似の信仰物と習合をし始めた。それは、チャンスン・ボッスである。チャンスン・ボッスの出現の目的は「ミロク」とは異なったが、民衆の欲求により「ミロク」の役割もすることとなり、その反面「ミロク」もチャンスン・ボッスの役割までしたのである。これは仏教が巫俗・道教・などの宗教と習合したことと同様である。

3) 結論

蘇塗の背景論

このように韓国で仏教の弥勒が民間の「ミロク」になった事は昔の蘇塗という背景があるからである。昔の韓国人は蘇塗という聖域空間で宗教儀礼を行った。大木があり、そこに鈴・太鼓をかけ飲酒歌舞として神を喜ばせた。当然、そこには巨大な石があった。巨大な立石をたてそこに神が宿っていると思った。木には生命があるためその木、自体が神であると信じたのである。これは未分化状態の原始自然信仰だといえるが、巨大な石・巨大な木は自然神でもありながら自分たちの祖先でもあった。当時の神観念は複合神の概念だったが、守護神の観念をもって、その神々が自分たちを守護すると確信したのである。さらに聖域空間では長竿を立て天から神が降りると信じた。したがって神を喜ばせる為に太鼓を叩いたり鈴をならしたりしたのである。

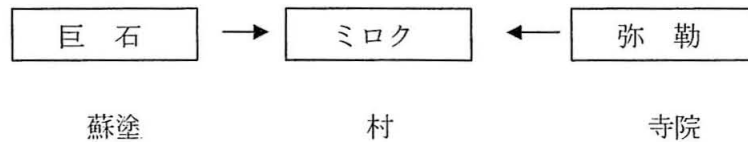
民俗学の先駆者である柳田国男は民俗という言葉のかわりに固有信仰という言葉を使った。仏教民俗を仏教と固有信仰という型で対立させた。柳田により、民俗は仏教以前の日本人の固有信仰から探るべきだといひ、日本の民俗信仰の中で仏教的な要素を排除すると段々その中身が見えるのでそれが日本人の固有信仰であると主張した。韓国仏教民俗の先駆者ともいえる孫晋泰は蘇塗考の中で、すでに朝鮮半島に根付いた仏教を認定しながらその仏教の起源を蘇塗から探そうとした。「馬韓伝」により、蘇塗は浮屠と似ているため蘇塗→浮屠→浮囡→仏塔として解釈したのである。言い換えると蘇塗を寺院と同じ意味として解釈した孫晋泰は、蘇塗で行なわれる宗教行為は仏教と似ているといった。これを美術史学者である朴容淑は蘇塗は仏教以前の伽藍であると説いたのである。しかし、蘇塗は仏教

のみならず、民俗信仰の元にもなる。長竿を立てて神を祀る習慣は巫俗でもみえる。巫俗の司祭である巫堂は長竿を一般的にはシンテ（神の竿）という。天から神が竿を通して降りると信じているのだ。まだ巨石を祀る習慣は仏塔のみならず、田舎の村でも「ミロク」という名でみえるのである。

巨石を祀る習俗は農耕社会で水を管理する龍神（ミリ）として祀られてきた。これは仏教の伝来に伴い弥勒信仰と習合して「ミリ」が「ミロク」になったのである。

これは韓国の仏教民俗の中で極めて重要な事である。

（簡単な図にすると下のようである。）



韓国における筆者の仏教民俗のとらえ方は「蘇塗の背景論」ともいいたい。仏教が韓国に定着することが可能だったのは蘇塗の民俗という土着信仰の背景があったからである。蘇塗の民俗は韓国民族の固有信仰として取り上げることができる。ただこの固有信仰は柳田国男の固有信仰とは異なるのである。柳田の固有信仰は日本人の心の中に存在している核のようなものであるが、蘇塗の民俗という韓国人の固有信仰は韓国人の心の底辺に位置している背景である。その背景には大木・巨石・長竿のような背景要素があり、その背景要素とそれをめぐる信仰行為は他の宗教が導入したときの媒介役割をしたのである。つまり、蘇塗に存在する背景要素と、信仰儀礼は他の宗教を受け入れる要因になったのである。これが弥勒から「ミロク」になる過程でもある。筆者はこのような蘇塗の民俗は韓国人の固有信仰であり、韓国仏教民俗の背景になるため、「蘇塗の背景論」を韓国の仏教民俗の一側面として本論文を通して論じたのである。